

●金子哲雄さんが書いた〈最後の御挨拶〉

会葬者の笑いと涙を誘った金子さんの挨拶状の全文。「早期リタイア制度」などのユニークな表現に、金子さんらしさがにじみ出ている

このたびは、お忙しい中、私、金子哲雄の葬儀にご列席賜り、ありがとうございます。今回、41歳で、人生における早期リタイア制度を利用して頂いたことに、感謝申し上げますと同時に、現在、お仕事等にて、お世話になっている関係者のみなさまにご迷惑をおかけしましたこと、心よりお詫言申し上げます。申し訳ございません。

もちろん、早期リタイアしたからといって、ゆっくりと休むつもりはもっていません！ 第二の現場では、全国どこでも、すぐに行くことのできる「魔法のドア」があると思っています。そこで、札幌、東京、名古屋、大阪、松山、福岡など、お世話になったみなさまがいらっしゃる地域におじゃまします。心あたりのよいお話を、お話を聞かせていただき、歩き回り、復讐復讐を繰り返したい所存です。

今回、ご縁がございまして東京タワーの足下、心光院さまが求の拠点となりました。「何か、面白いことがないかな？」と思われまして、チャペル内と隣接する東京タワー方面に合わせ、金子の夢を思い出して頂けたら幸いです。

この度、葬儀を執り行なうにあたりまして葬儀社のセレモニーマヤやさき 宮崎美津子さまには生前より真摯に相談にのって頂きました。また、自分の歩んできた道と中かりのある港区東麻布を終の住処とすることを許し頂きました。浄土閣 心光院 御住職 戸松 義晴先生には公私に渡り、死生観などのアドバイスを頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

最後になりますが、本日、ご列席下さいました、みなさまの御縁とご多幸を心よりお祈りしております。41年間、お世話になり、ありがとうございます。あが、墓園にて御礼です。

平成24年10月1日
流通ジャーナリスト

金子哲雄



葬儀は心光院本堂に花祭壇が飾られ、しめやかに行われた

金子哲雄さんの著書



セレモニーマヤやさき
国東京都江東区門前仲町1-2-8
☎03-3643-5696
<http://soujibestnet.jp/miyazaki-tokyo/>



葬儀が行われた東京タワー近くの心光院

流通ジャーナリスト 故金子哲雄様のご葬儀について

宮崎美津子

10月1日(月)の午後9時頃、携帯電話に着信が入っていたので、金子様に折り返しの電話を入れました。すると「宮崎さん、もうお別れです。これでさよならです。」とおっしゃられました。私は「でも立ってもお別れせず急遽ご自宅へ伺いました。『宮崎さんお忙しい中ありがとうございます。もうお別れです。一ヶ月半、命をいただきました。ありがとうございます。』無言の私に「私の人生に悔いはありません。さよならです。あとはよろしく願いいたします。」金子様の温かい手で、私の手を包んでくださいました。

<奇跡はないのか、神様どうかこの方を助けてください。>私は思わず心の中で叫びました。そして、その時が近いことを悟りました。臨終を迎える時まで、ご自身の成すべきことをきっちりこなし、縁立ちの支度を奥様と一緒になされる気持ちで考えると、涙が止まらなくなり言葉が出ませんでした。そして、日付が変わった翌10月2日(火)金子哲雄様は縁立ちされました。

私が寝台車で迎えに伺った時、すでに金子様は、トレードマークともいふスーツに着せ替えられておられました。オレンジ色のネクタイ・眼鏡、まるでこれからさうそうと仕事に出かけるかの様なお立ちでした。

お通夜・ご葬儀は、ご本人の想像を超える程の会葬者で溢れ、告別式には参列された約300名近くの皆様に花入れのお別れをしていただきました。

私はこの一ヶ月半、一人の青年の終末期を見届けさせていただきました。そのご縁を通じて、葬儀社としての在り方、人を送るといふ意味を新たに考えさせられました。

死への恐怖を少しでも克服できるのか？死を受け入れる為に何をすればよいのか？自分の逝き先を自分で決められるのか？それぞれの立場や状況などにより様々な思いがあると思いますが、縁立つ方に寄り添う方の支えはとて大切だと感じました。金子様は奥様に支えられ、人としての尊厳を守られ、そして愛情を注がれて人生の幕を引かれました。金子様は見事に自分の逝き先を決められたのです。

流通ジャーナリスト金子哲雄様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



人生の最後まで仕事を全うし、自身の生きざまを発信した
亡くなる1カ月前、金子さんは葬儀社のセレモニーマヤやさきに「葬儀について相談したい」と自ら電話。自宅を訪れたセレモニーマヤやさきの宮

崎美津子さんは、本人の葬儀の相談だったと知り、驚いたという。その後は、ベッドに横たわって酸素吸入をし、時折り咳き込む金子さんと、葬儀のプランを立てていった。まずは葬儀の会場を探すことになったが、金子さんは自身が入るお墓

も探していたため、宮崎さんは自分の菩提寺でもある東京タワー近くの心光院を紹介。すると「僕、東京タワー大好きなんです」と、満面の笑みを浮かべたという。偶然にも金子さんの思い入れのある場所でもあり、後日、奥さまにお寺と墓地の供養塔を見てもらい、会葬者にとっても便利な立地条件であることから、葬儀も心光院で行うことが決まった。その後、心光院のご住職は金子さんを訪問し、死生観などについて時間をかけて話し合ったという。

葬儀の会場とお墓が決まった後も、葬儀の進行、会葬への挨拶状やおもてなしまで、すべて自分で決めたという金子さん。その様子は実に淡々としていて、強い意志にあふれていたという。「金子さまは、見事に自分の逝き先を自分で決められました」と、宮崎さん。亡くなった後、テレビなどでも紹介された心温まる会葬礼状は、ユ



告別式では参列した約300名の会葬者も「お花入れ」のお別れをした

モアを交えつつ周囲への感謝や気遣いなどを表現した、金子さんらしさにあふれたものだった。自分らしい終活をやり遂げた金子さんに、感謝せずにはいられない。

金子さんの死後、亡くなる1カ月前ほど前から書き始めたという『僕の死に方 エンディングダイアリー1500日』が出版された。終活を参考にしたい方は、ぜひ一読を！

自分の葬儀をプロデュース 流通ジャーナリストの 金子哲雄さんの「終活」

2012年10月、41歳という若さで急逝した人気流通ジャーナリストの金子哲雄さん。その突然の訃報に誰もが驚かされたが、自らの葬儀を自身でプロデュースしたことで話題となった。

